ZENSO
全奏協通信
特定非営利活動法人　全国邦楽合奏協会（全奏協）
2023年度
第１３号
2024年3月31日発行

邦楽演奏とAIをテーマに全奏協Zoom交流会開催

23年8月19日19時30分から全奏協Zoom交流会が開催されました。
その模様を要約し紹介します。詳細はYouTubeを御覧ください。
URL → https://www.youtube.com/watch?v=UFgYjngyP2U

立花茂生
全奏協副理事長
（司会）：

全奏協はズームを使った 講習会と交流会という2種類の事業をしています。今回、全奏協交流会AIをテーマについてネットを通じて邦楽とAIとのかかわりに関心のある方が交流できればと思って企画をしました。

松尾祐孝
洗足学園音楽
大学教授：

私は現代音楽の作曲家で30歳ごろから邦楽器のための作品をとおして邦楽文化を日本から世界に発信しています。また日本AI音楽学会の代表ですがAIの研究者でもAIに詳しいというものでもありません。なぜ私がそのAIというものに関わったか説明します。

洗足学園音楽大学は多少は時代の流れに迅速に対応している音楽大学ですが、それでもそのAIという言葉がなかなか音楽大学の中で語られません。約7年前に、大学の一般教養教養科目拡充を目的にAIを授業に取り込むことになり、私が一般教養の講座の中に「AIと芸術」という授業を組み込み同時に日本AI音楽学会を設立しました。

研究者だけでなく、多方面の方に集まっていただきました。AI研究者、企業、作曲家、クリエイター、一般の音楽愛好家つまり一般の市民の方、そして演奏パフォーマーが参加し意見を交換する場として機能しています。

東京大学の嵯峨山（茂樹）先生という方の教室が開発したオルフェウスという自動作曲AIが一般公開され、そのイメージが強いですが、AIは現在、部分的に活用するということが多く行われています。

ヤマハなどが開発している相互のタイムラグを解消しながら複数の場所で演奏ができアンサンブルを可能にするシステムにもAIが使われています。

レコーディングの現場では多重録音をします。今までは人間の側がリズムに合わせて演奏してそれを多重録音しましたが、これからは収録した録音の間や揺らぎにあわせて伸縮することがAIを使ってできるのではないかという研究もあると思います。

音楽著作権との関係でいうと、作曲家や創作者が心配していることの一つが、著作権に関してです。AIは音楽情報を大量に取り込みます。自動で音楽を構築するのがAIの一つの側面です。著作権の侵害に関して今、大変な議論が起きています。一方で、作曲家、創作者の側が「AIストップ」と言ってもAI研究者はさらに研究をすすめる。その流れを止めることは難しい。むしろどのように権利を侵害することなくAIを活用して共存をはかることができるかを研究しています。

（２面に続く）

全奏協ズーム交流会　募集チラシ

全奏協Zoom交流会
邦楽演奏とAI

昨今注目されているAI技術について演奏者の立場でどのような活用や将来が考えられるか自由ディスカッションし、邦楽で活用できるAIについて認識を深める。（専門知識は不要です）

日時
８月１９日(土)
１９時３０分～２１時

対象者
全奏協会員、Facebook全奏協グループメンバ、邦楽に興味ある方

参加費　無料

ゲスト

松尾祐孝
日本AI音楽学会（洗足学園音楽大学、全奏協顧問）
・音楽教育およびAI音楽の現状と今後の展望、
・著作権とAIのトピック

立花宏
都立大学、邦楽ジャーナル・コラムニスト
・邦楽演奏者向けのツールおよび活用できる分野の紹介
（演奏から音声分離、楽譜の写真から楽譜・MIDIの生成等）

申込方法
右側のQRコードから申込
受付後、Zoom会議室のURLをお送りします。
https://forms.gle/teuMejkahFrdPg85A

主催　NPO法人全国邦楽合奏協会　問合せ　info@zensokyo.org

全奏協１０周年記念誌完成
～全奏協の１０年をたどる～

コロナ禍で発行が遅れていた、全奏協創立１０周年を記念してA４版２４ページの「全奏協１０周年記念誌」が刊行されました。各界からの祝辞、10年のあゆみ、海外活動、担当者の声がなどが紹介されています。また、巻末にはフォトギャラリーとして発足当時からの写真も多数掲載されました。

その中から令和5（23）年度全奏協総会後に実施された創立10周年記念座談会記事を要約掲載します。

（２面に続く）

第９回全奏協全国邦楽合奏協会邦楽コンクール
記念写真　23年8月11日　大阪狭山市文化会館

完成した全奏協10周年記念誌

全国邦楽合奏協会
邦楽コンクール　再開

コロナ禍のため延期されていた第９回全国邦楽合奏協会邦楽コンクールが2023年8月11日（祝）大阪狭山市文化会館「SAYAKA小ホール」で４年ぶりに開催されました。

最優秀金賞には鹿野竜靖さんが選ばれました。

（３面に関連記事）

主な記事

２面・邦楽演奏とAI　全奏協Zoom交流会（1面のつづき）
・全奏協１０周年記念座談会（１面のつづき）
３面・第９回全国邦楽合奏協会邦楽コンクール
・邦楽演奏とAI　全奏協Zoom交流会
（２面のつづき）
４面・全奏協役員　福岡合宿
・理事長　あいさつ
・ながさきピース文化祭2025で
第７回全国邦楽合奏フェス開催
・編集後記

www.zensokyo.org

全奏協10周年記念座談会

2023（令和５）年5月28日（日）東京飯田橋セントラルプラザ会議室で行われた令和５年度総会終了後、当協会創立10周年記念行事として座談会を開催し創立当時の経緯を振り返り、全奏協がこれから目指す方向などを探った。

司会は立花茂生（副理事長）、パネリストは藤本玲（理事長）、田中隆文相談役（『邦楽ジャーナル』編集長・元副理事長）そして石井恭子（設立当初から事務局担当）がつとめた。

◉　発足の動機、創立の主旨

この団体を立ち上げたのは学校の邦楽指導に関わるなか、卒業生がその後も邦楽を楽しめる場を作りたいからだと藤本は言う。08年に田中に石井（恭子＝現事務局）とともにアドバイスを求めた。

「現在、全国に60くらいアマチュア合奏団があるが相互のつながりは希薄」と田中。各種情報の提供をうけ、2011年の設立総会にこぎつける。マスコミの力を借りること、徳島県が応援する立場を鮮明にしてくれたことが、後押しとなった。

11月にはNPO法人化し社会的な意味も増した。「田中さんに紹介して頂いた各界の方に直接やりたいことを説明」と藤本。NPO法人化で文化庁、自治体に認知してもらえたが苦労もあったと石井。

◉　この10年間の成果

「第一の成果は全国でアマチュア活動をしていたグループと知り合え、それらのスキルを知ったこと。また、『教え子のため』から、一般の方、アマチュア合奏団全体が対象と考え方を変えたことが結果的に良かった。業者さんやプロの方など多くのつながりができたのも大きな収穫」と藤本。「横に石井さんがいてくれて、とても助かった」とも。「特に辛かったのは2014年の三鷹市での全奏協フェスの会場とコンビニに頭を下げて回っての駐車場探し」と石井。また「12年の徳島国文祭では助成金を得るための申請、報告書作りも大変だった」ともいう。そのかいあって国・自治体から相当の助成も受けた。「それが業者やプロにも注目された」と田中は言う。

◉　海外活動とコンクールについて

英（崇夫＝海外担当理事）が韓国海洋大学校（釜山）のキム先生と親しく「日韓伝統音楽会議」を企画した。それが大連（中国）公演につながった。最近ではZoom使用の「夕顔」などの講習会で成果をあげている。麻植（常務理事）担当のコンクールは９回目を再開した。コンクールは出場することで励みになる。

◉　これからの全奏協は

「まだできていないことは全国の支部を確立すること。そうすれば、文化庁などの助成が全国規模になる。それが今後の課題」と藤本。

「でも本当に一番たいせつな交流ができているのか、ということだ。コンサートのみではなく末端会員相互の活動が重要で、それが一緒になることで会員同士の大きなエネルギーが生まれ全奏協が活性化する」「合宿なども一つの方法。夜の交流が活性化の鍵」と田中。

名村（茂代＝理事）は「若い人にアピールするにはネットは有効な手段」。

中川（雅玲＝理事）は「全奏協で曲を委嘱して、テーマ曲として全国で演奏してはどうか。また、外国人の弟子が母国でいろいろ企画をするが、海外では日本文化に大変興味と感心をもって熱心に聴いてくれる」。

松尾（祐孝）（顧問＝作曲家　洗足学園音大教授）は「フェスについては、コンサートのみでなく展示会、講習会などが組み合わされているあの規模のものはすごい。だけど、全国から集まった出演者は他の演奏を聴き交流する余裕がなかったのが問題か。21年の田辺市フェスでは、全国の参加者に指導してその後本番というのは活気があってよかった。海外に出かけると自分がアジア人、日本人だと感じる。邦楽器は世界中見わたしても、オケをバックにソロが成り立つ楽器で種類も多い。

今後は財界、政界人にアピールする必要がある。また私が関わっている機関や国際イベントに参加して国際的交流の拠点としていければさらに発展するのでは。そして外国に目を向けることが重要。

最後に司会の立花が「いくつかのアドバイス、問題点、今後へのご提案が出ましたが、最も大きなキーワードは『交流』だと思いました。ありがとうございました」。

（敬称略　T）

（１面からのつづき）司会：松尾先生、ありがとうございました。

続いて立花宏先生にお願いします。立花宏先生は邦楽ジャーナルに「インターネットで邦楽（※1）」というコラムを執筆されご存じの方も多いかと思います。それでは、よろしくお願いいたします。

立花　宏
東京都立
大学教授　：

生成AIについての話がありました。それぞれ特徴があります。チャット型AIは子供が勝手に使っちゃいけないと文科省の資料で初めて知りました。

一方、日本の学生はお金がなく日本は23年7月の時点で先進国（OECD＝約40カ国と地域）で最貧国に、そして、貧富の差もアメリカを超えて最大になったと聞きます。

ですので、学生には無料、かつ人類共有の財産としての改変配布可能なオープンソースで使えるものを紹介しています。

五線譜の下に尺八譜を自動的に表示する追加拡張プログラム（プラグイン）を公開してましてオープンソース化しています。

Googleには32年間の音楽、28万時間を直接学習させたデータがあります。楽器の音、アンサンブルになった音を生成するシステムが一部公開されていますが、そのまま公開すると問題もあり慎重な対応を待っているところです。

実際のAIの技術で私たちが直接役に立つのは音源分離です。閉じた会社の少人数で開発するというのはもう時代遅れで、オープンソースで世間の人も巻き込んで蓄積していくほうが格段に早い。

80年頃出た山本邦山がソロの5人の尺八演奏家がバックを務めるスタンダードジャズを、マックススプリンターやアルティメイトボーカルリムーバver.5、そして耳コピーの支援ソフトのメリッサも使って音源分離をしました。

岡村慎太郎さん（Webページ参照）は自身の演奏録音を音源分離してマイナス1カラオケとして販売。三弦・箏のものと三弦のみがありどちらにも歌は入っています。歌の入ってないマイナス1はないので尺八奏者にとっては有り難い。箏か三弦を弾くという方も使える。

J-POP分野ではアイミョンの弾き語りの歌を消すことで尺八用のマイナス１カラオケができる。

ボーカロイド（ボカロ＝声のアンドロイド）人気歌手の四国めたんや九州そら（※２）などに著作権的にグレーですが、元の地歌の箏演奏を加えて「黒髪」を現代語訳で歌わせました。年配の方の歌とはだいぶ趣がかわります。また、古曲を最近流行りの時短で歌わせることもしています。

データベースの構築が急がれます。古典や著作権の切れた「宮城曲」を五線譜で取り込んで、その後、縦譜化するなどの試みもしました。

ソニーの研究所では、実際にプロのピアニストの頭にセンサーを取り付け、その演奏を解析しています。そして、その技法を学ぶことができます。その技術で学んだ演奏家がいろんなコンテストに出場しています。優勝するようなピアニストも輩出しているという成果も上げています。邦楽への応用も是非どなたか考えていただけると面白い。

（３面に続く）

註

※１　邦楽ジャーナル2024年4月号に「尺八の音を観る！」と題する特集記事を執筆

※２　東北ずん子・中国うさぎ・四国めたん・九州そら＝最近の人気ボカロの歌手名

第九回
全国邦楽合奏協会邦楽コンクール開催

第８回コンクール以来、コロナ禍のため中止されていた全国邦楽合奏協会邦楽コンクールが、2023年8月11日（祝）大阪狭山市文化会館「SAYAKA小ホール」で「達の部」19名（組）の出場者で実施された。他部門の参加者はなかった。

その結果、金賞は《阿修羅》（土井啓輔作曲）を演奏した鹿野竜靖さん、銀賞は《箏のためのアラベスク》（吉岡孝悦作曲）を演奏した金子昇馬さん、銅賞は、《甦る五つの歌》（沢井忠夫作曲）を演奏した長谷由香さん、奨励賞は《sigh（ためいき）》（前田智子作曲）を演奏した渡部志津子さんが獲得した。入賞しなかった参加者との差もわずかな点数でハイレベルなコンクールとなった。（T）

最優秀金賞を受賞した鹿野竜靖さんとその演奏（写真右）。演奏曲は《阿修羅》（土井啓輔作曲） 23年8月11日（祝） 大阪狭山市文化会館

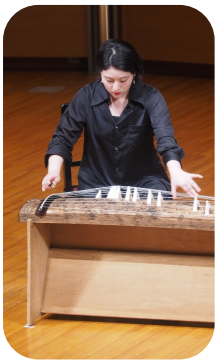
銀賞を受賞した金子昇馬さん。演奏曲は《箏のためのアラベスク》（吉岡孝悦作曲）

銅賞を受賞した長谷由香さん。演奏曲は《甦る五つの歌》（沢井忠夫作曲）

奨励賞を受賞した渡部志津子さん。演奏曲は《sigh(ためいき）》（前田智子作曲）

藤本玲全奏協理事長から最優秀金賞を受賞する鹿野竜靖さん。 23年8月11日（祝）大阪狭山市文化会館）

金子昇馬さん



長谷由香さん

渡部志津子さん

【審査員】
石川利光(尺八演奏家)　石川憲弘(箏曲演奏家)
菊重精峰(箏曲演奏家)　前田智子(作曲家)
吉岡紘子(箏曲演奏家)　の各氏

（２面からのつづき）司会：立花先生ありがとうございました。これから、自由討論に入ります。聴衆の側に志村哲（大阪芸大教授）先生がおられるので一言お願いします。

志村　哲
大阪芸大教授　：

今あった、ソニーの研究所のお話に関連してですが、私は首振りセンサーを3軸で作りました。尺八の音形をリアルタイムで検出することもやっていました。当時はまだ、ワークステーションや大型コンピュータの時代でした。立花先生がご紹介くださったほとんどの技術は将来の夢として研究が盛んで、1987年と99年に教科書としてまとめられました。

著作権の切れた楽曲をAIに学習させることができると面白いしありがたい。三味線などの曲弾きを作曲させたらおもしろい。西洋音楽では作曲家名や楽譜が残っているのでデータベースの構築はある程度できます。民族音楽は作曲者名も楽譜もないものが多く、同名異曲あり、アドリブあり、短縮ありと難しい面や課題が多い。そして、世界の音楽は大多数が後者ですから。

司会：ありがとうございました。これで、交流会を終わります。（T）

志村哲教授によるサイバー尺八の実演動画サイトの紹介

「ながさきピース文化祭２０２５」で 第７回全国邦楽合奏フェスティバル　開催

全奏協は「ながさきピース文化祭2025（第40回国民文化祭、第25回全国障害者芸術・文化祭）」の分野別交流事業（邦楽）に実行委員として参画します。その交流事業が「第７回全国邦楽合奏フェスティバル」となります。

その実行委員会では、長崎県に密着した邦楽文化を国内外に発信し普段和楽器に触れることのない人でも邦楽に興味を持てるよう、和楽器体験・楽器展示等の邦楽関連コーナーも設け邦楽の総括的祭典を目指し企画調整中です。

その中で、全国からの参加者と長崎県地元三曲演奏家、地元学生、長崎県出身の演奏家も交えての全国邦楽合奏コンサートが企画され、合同曲のワークショップと発表を予定しています。合同曲として、長崎県で起きた交通事故をテーマとした《ステラオブあかねＭエンジェル》（前田智子作曲）、長崎にちなんで《長崎十二景》（唯是震一作曲）そして藤原道山（尺八演奏家・東京藝術大学助教授）氏が作曲する和楽器合奏曲とそのワークショップ及び披露演奏等が予定されています。

地元三曲協会による和楽器体験コーナーや黒沢琴古、そして、中尾都山に、影響を与えたとされる長崎出身の近藤宗悦に縁の虚無僧尺八の聖地と言われる虚無僧寺「松壽軒」にまつわる「虚無僧尺八ストーリーの展示」も企画中です。

長崎県らしい地元密着の内容となるような企画が盛り込まれたイベントになる予定です。

（企画内容は変更となる場合があります＝T）

長崎市古町橋付近にある虚無僧寺「松壽軒」跡の石碑

理事長ごあいさつ

理事長　藤本玲

令和６年はやっとコロナも落ち着き元の日常を取り戻せると思っておりましたが、元旦より能登半島地震やJAL航空機事故など痛ましい災害や事故が、おこってしまいました。改めましてお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。同時に地震により甚大な被害を受けられ、長引く避難や不自由な生活を余儀なくされている皆様には、一日も早い復興を願いお見舞い申し上げます。

さて、2011年に全奏協を立ち上げ、13年が経ちました。正直コロナ禍ですっかり創立10周年を失念しておりましたが、この３月に「10周年記念誌」が完成いたしました。皆様にはたくさんのご協力を頂き、交流や情報交換、学びの場となった10年であったと心より感謝しております。

令和７年は長崎原爆投下80年にあたります。その長崎で「全国邦楽合奏フェスティバル」を開催します。皆様、一緒に長崎で平和の音を奏でましょう！ご参加よろしくお願い致します。

福岡合宿実施
～その成果と課題～

2023年12月1日～12月3日に福岡市の佐藤法子理事宅で創立１０年記念誌の編集会議のための１０年間の見返り、今後１０年の活動の方向性の意見交換、合奏練習、そして親睦をかねて、全奏協役員合宿を実施しました。

演奏に関しては練習時間（↗）がなかったため軽く合わせる程度で終わりましたが親睦を深めることはできました。

また、10周年記念誌の発行を見すえての話し合いでは、全奏協活動の成果として、邦楽界で流派を超えた全国組織という、まれにみる存在として邦楽合奏フェス、コンクール、海外との交流等、各種活動で成果をあげたと総括されました。（↙）

今後の10年については、①全奏協発足当時の目的や根幹が曖昧になりはっきりしなくなっているのではないか。②会員数が増えない点では、②－1全奏協の会員になりたいと思う魅力がないのでは、②－2会費を払った分の対価が少ないのではないか。③理事や会員に若い方が必要なのではないか。④新しい風をいれて組織を活性化させる必要があるのではないか。⑤今後の全奏協のあり方については、⑤－1総会か理事会で全員での意見交換が必要、⑤－2国文祭以外での注目を集めるための企画事業を考える必要があるのではないか、などの意見が出され、今後さらに課題を検討し具体的な解決策を明示することを確認しました。

（中川）

編集後記

全奏協10周年記念誌を作り終えました。この10年間撮り貯めた写真を見返しながら、その軌跡をたどってみると「全奏協活動」を通じて個人では得難い体験を数多く積むことができたことに驚きます。そして関係したすべての皆様に感謝を申し上げずにはいられません▶超辺鄙な地に住まいした筆者がインターネットの前身であるパソコン通信で当時20代、30代だった全国の邦楽愛好家と交流し尺八や箏で遊べたことも「全奏協」の仲間を知る契機になりました▶伝統文化に限らず多くの組織が後継者不足で消滅しています。「人材」とよく言われますが人は材料ではありません。人格を持つ人間です。人間あっての「事業」だし「事業継承」だと筆者は思います▶私はMac使いですがWin95というOSが発売されてから30年が経とうとしています。IT機器ネイティブの若い人が30歳代になるなか「全奏協活動」で出会い、交流し、楽しんでもらえる若い人が増えることに期待します。「全奏協」で遊びませんか。

（T＝広報担当 高橋哲也）